

# 中山元成

さしまちや  
猿島茶の生みの親 坂東市



(中山信一郎氏提供)

文政元年(1818) - 明治25年(1892)。猿島郡辺田村〔坂東市〕生まれ。中山家は豪農で、若くして家業を継ぎ、特に茶業に着目して、猿島茶の改良と普及に努める。嘉永5年(1852)、関宿藩が江戸に猿島製茶売りさばき所を設けると、その責任者となり、藩財政の立て直しに一役かった。幕末には貿易に必要な海外の知識を身につけ、安政5年(1858)、日米修好通商条約が結ばれ、欧米諸国との貿易が始まると、猿島茶の売り込みに成功し、後の日本の重要輸出品の一つとなる。その後も茶の栽培や製茶の指導に力を入れ、自宅に製茶伝習所をつくり製法の改良に努め、生涯を茶業の発展に尽くす。晩年は自ら「茶顛」と号した。

中山元成は、猿島郡辺田村〔坂東市〕の名主<村長>の家に生まれました。中山家では子どもの教育にもとても熱心で、元成も小さいころから、家族や親せき、中山家に身を寄せていた学者たちからいろいろなことを学びました。元成が15歳になった時のことでした。

(もっともっと勉強して、たくさんのことを学びたい。そのためには、江戸に出なくては。)

元成はこう考えていましたが、体が弱かったために江戸での勉強はあきらめるしかありませんでした。当時、元成が住んでいた地方には、もともとこれといった特産物がなく、農民たちは貧しい暮らしをしていました。中には農村を捨てて江戸などへ出かせぎに行く者もいました。

(このままでは、この地方の村々はどんどん荒れはててしまう。なんとかしなくては。何か特産になるものを作れば、農民が豊かに暮らすことができるはずだ。)

元成は、この土地が茶の栽培に適していることに目をつけます。

(これだ。茶の栽培をすればいいんだ。)

そして天保5年(1834)、江戸に出た時、京都の宇治の茶づくりの名人、多田文平に会い、彼を辺田村の自宅に招き、茶づくりの技術を学びました。父の跡を継いで名主になると、元成は村の人たちに茶の木を植えさせ、茶の栽培を奨励します。はじめのうちは技術的に未熟な者が多く、よい茶がなかなかできませんでした。そこで元成は、できた茶の優劣により、買い入れの値段に差をつけるなどして品質の向上になみなみならぬ努力をしたのです。

こうして、この地方の茶の生産量は増加し「猿島茶」として江戸の市場でも名が通るようになってきました。関宿藩ではこれを藩の



せいちゃし どうしょうれい ず  
製茶指導 奨励 図 (中山信一郎氏提供)

専売制にしようとして、元成にその仕事を任せました。

(これからはもっともっと猿島茶を知ってもらおう。全国に猿島茶の名が広まれば、村の人たちも豊かなくらいができる。)

元成は江戸にある藩の猿島茶売りさばき会所に勤め、売り先を広げるのに努力を続けました。そして、安政2年(1855)から約1年をかけて主に西日本を中心に、特に地方の特産の様子を視察する旅に出ました。また、長崎では貿易に必要な海外の知識も身につけました。

こうした中、安政5年(1858)には幕府が日米修好通商条約を結び、外国との貿易が始まりました。

(これはチャンスだ。この機会に外国にも猿島茶を知ってもらおう。) こう考えた元成は、長い間苦心を重ねてつくった郷里の猿島茶をたずさえ、下田のアメリカ領事館を訪れ、猿島茶の売り込みに成功するのです。その後、元成は郷里と江戸、横浜を何度となく往復し、茶の輸出に努力しました。こうして、茶は日本の重要な輸出品の一つになっていったのです。

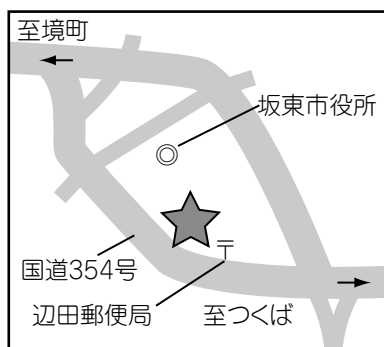
明治になってからは、自分の屋敷に「製茶伝習所」を開き、茶の作り方を記した『製茶略説』などの著書を出版するとともに、農村を回って農民に茶のつくり方を伝えることに全力を尽くしました。年をとってからは、自分から「茶顛くお茶狂い」と名乗るほど茶業に打ち込んだ一生でした。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 茶顛中山翁製茶紀功碑

所在地 坂東市辺田 558 - 4

内容 中山元成の経歴を刻み、その業績を称えるために建てられたものです。



### おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)

『茨城の顔』(室伏勇・茨城新聞社・1969)